

おい同胞。おい同胞

なぜ泣くのだ。泣いてもいいが おい同胞。おい同胞。 仲よくしようじゃないか。

おい同胞よ。なぜ泣いています。なぜ曇った顔しています。泣くままでいいから顔をあげてください。

泣かねばならぬのは、悪い悪い久遠劫来の業のためです。今人を呪い、世を恨み、我と我身を抱いて泣かねばならぬのは、みんな自分のした悪い因から果がなっただけのことです。道理から言えばたとえこの身を人様から八つ裂きにされましても、それは自分のしたことが自分に返って来たのです。人を恨み世を呪うのは重ねての罪です。

けれど業の深さは、罪の重さは、そうとはどうして思えないで、理屈で知りつつも、猶他人様を恨み、世を呪わずにはいられません。何たる悪人なのでしょう。

救われそうにもない悪人。地獄必定の大悪人。行きづまって泣かねばならぬのは無理もない。幾夜寝ざめの涙の枕、我が身の不幸を泣く子はないか。子を失って泣く親はないか。親を失って淋しい子はないか。夫の冷たい仕打ちに痩せ衰えた妻はないか。世に入れられず無念の齒をくいしげる青年はいないか。思ったことのすべては出来ず、過ぎし昔は夢のように老い衰えて、今や墓場に急ごうとする老人はいないか。不幸の子たちよ、今こそ涙をふけ。いいえ、泣くままでいい、涙のままでもいい、顔をあげて私の言うことを聞いて下さい。

私が今更泣くのは遅い。泣いてもいい。だが知っていねばならぬことがある。お阿弥陀様。それは私の親様である。

私は今になって漸く、私をどうすればいいかと問題にして、苦しみをかけて来たけれど、私が私を問題としないはずとずっと久遠の昔、私を問題の種として、しつくり抱いて、さめざめと泣いてくれた人がある。それが親様だ。

まだ夜は明けないか。

今さら自分を自分で抱いて泣いたって、無始の悩みの解決がっこうか。夏の日に臭いもの集る蠅のように、追えども追えども集る煩惱の蠅、そうして悩みつかれて苦し急いでいるが、その行手は墓場、暗黒、地獄。

とこしへに涙はかわかぬ。けれどけれど

衆生苦惱我苦惱

衆生安樂我安樂

私がさめざめと泣くより先に、泣きたもうてある如来を知らぬか。解決つかない私の涙の根源について、五劫の思惟をお垂れ下さいまして、永劫の修行によって、私の救われて行く全部の解決がついています。涙の根源に解決がついています。

法蔵菩薩の大願成就を念じます。涙は流れます。

菩薩の御苦勞は、冷たい理論ではわかりません。

小さい人間の思索では味わえませぬ。

それは全く、涙であります。

菩薩の涙と、汗と、血と、脂とは凝つて南無阿弥陀仏の名号となりました。

お阿弥陀様のみ胸の内には、大ききの知れぬ御慈悲が充ち充ちています。太きの知れぬ御智慧が閃めいています。不可思議な光明はゆらゆらと流れ出て微塵世界に充ち充ちて、至らぬ隈もございませぬ。

み仏様の御涙の一滴も、御汗の一滴も、火の中に流したまいし血潮の一滴も、それらはいったい私を除いて誰が受けるのでしょうか。誰の上に注がれたのでしょうか。

「弥陀の五劫思惟の願よくよく案ずれば、ひとえに親鸞がためなりけり。」

私の助かる資格も価値も、私の泣く涙の中にはありません。微塵ほどもありません。

如来様のみ胸の内に、私の助かるわけも、救われる方法も、皆成就されてあります。2 私のおこさねばならぬ願を、仏がかわつておこして下さったのが南無であります。私のせねばならぬ行を、如来が成就して下さったのが、阿弥陀の三字であります。

「そのまま来いよ。」と呼んで下さる、やるせないお勅命が南無であります。私の全てに行き詰まつて、私の小さいはからいが役にたたないとわかつて、素直に如来様におまかせする心、それは如来からたまはった心、それが又南無であります。

小慈小悲もない身であります。

私どもは、容易に他人様にいささかの物さえ差し上げにくいのです。差し上げてもすぐ汚い心がつきまつています。ソロバンを弾かないでは慈善事業にも金は出しませぬ。人並みや、名間に寄付でもするのです。

たとえ物は与えても、体は与えませぬ。更にいのちは与えませぬ。

如来様は、如来様の生命のありつたけを私に下さいます。南無阿弥陀仏の主にして下さいます。信の一念に、宇宙の限りない万善万行の大功德を、全部私に下さいます。

善導大師様は

「南無というは帰命なり。またこれ発願廻向の義なり。」

と御釈して下さいました。帰命とは御勅命が、私の魂のどん底に徹到して下さった心の心であります。親心が知れて帰順帰托た心であります。発願廻向とは、如来様の御誓いによって如来の生命の全部を、私のものにして下さることでもあります。たとえ乞食の姿が来ましても、念しかしていましたら、滅多に馬鹿にしてはなりません。やがて仏になり得る絶対真実をもっています。乞食の人間相を一片はげば、そこには一切勝者たる価値が輝いています。み仏が生ききつていられます。

苦の中に立ちきれませんか。涙のままでもいいが、涙のままが、ニツコリ微笑にかわりはしませぬか。み仏と別に泣いてはなりません。私が流す涙はそのまま如来の涙であります。

苦の中に立つ力はそれしかありません。しょせん、地上から召されて安養浄土にかえりゆく日までは、苦の涙はつづきます。

永遠の微笑！

それは人間苦の内に与えられた白道の味であります。苦の真ただ中で、仏心を憶念する時、「心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」と苦に立ちきらしていただきましよう。

おお同胞、菩薩様たちは勝友だとおっしゃって下さるではないか。親鸞様はおん同朋おん同行とおっしゃって下さるではないか。おん同朋、おん同行には高下はない。嬉しいではないか。

どんな時でも親鸞聖人様だけは、私を棄てては下さらない。

み仏様だけは、はなれては下さらない。

おお同胞、おお同胞、と。

お慈悲だもの、皆仲よくしようじゃないか。

どうせ長い人生ではない。けれど、永劫に離れぬ同胞だぞ。なつかしい。

「おい同胞」「おい同胞」

涙がにじむ。憐れな人を慰めようではないか。

仲よく生きようではないか。